

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

# 装甲戦士 アーマーハート

火村龍

表紙イラスト：ひなくま

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『蒼甲戦士マリンハート』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



装甲戦士  
ソードアート  
オンライン

火村龍

表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

## Characters

---

みずの

### 水野サヤ

学園の生徒会長として全校生徒に頼られている女生徒。父の遺したブレスレットを使い、マリンハートとして悪の組織ゼルガと人知れず戦っている。

### ゴルバ

悪の組織ゼルガの幹部。放出した熱でマリンハートのスーツの出力を低下させる能力を持つ。

「あなたたち！　ちゃんと朝礼に出なさいっ!!」

校舎裏、生徒たちが寄りつかない場所に、水野サヤの甲高い凛とした声が響き渡った。

「チッ、んだよ、会長様か……」

その声に気怠そうな声で反応したのは数人の男子生徒——サヤが手を焼いている不良たち——だった。濁りきった瞳がサヤを見上げ、反抗的な眼差しがスタイル抜群の少女を射抜く。

それに対し、学園の生徒会長であるサヤは一步も引かず、腰に手を当ててキッと睨み返す。やや茶色がかった瞳に、白い肌。腰まである長く艶やかな黒髪がわずかに揺れ、スラリと伸びるしなやかな脚がサッと前に出た。

「ほら、立ちなさい！　さっさと歩く!!」

不良たちの逞しい腕を見ても怯むことなく、傷一つない細腕を伸ばして一人の腕を取る。それを待っていたかのように、不良の目がギラリと危険な光を放った。

「うっせえなっ!」

ゴオッッ!!　鍛えられた不良の腕が風を切ってサヤに迫った。だが次の瞬間——。

「があッ!」

「ふんっ、ほんつとに懲りないんだから」

地面に伸びていたのは不良の方だった。サヤは青いブレスレットをつけた細腕で伸びて

きた不良の腕を取ると、目にも留まらぬ早業で彼の力を受け流し投げ飛ばしたのだ。

「クソツツ、覚えてろよ!!」

「はいはい。ちゃんと覚えてるわよ」

捨て台詞を残して去っていく不良たちを見送り、サヤは校舎に戻るのだった。

「さすがです会長、ありとうございます！ わたしの仕事なのに、恐くてできなくて……  
本当に助かりました！」

校舎に入るとすぐ、一連のやり取りを見ていた風紀委員の女の子がお礼をいつてくる。

「いいのよ。やっぱり怖いものは怖いもんね」

サヤはなんでもないとというように手を振ると、彼女の尊敬の眼差しを受けながら颯爽と生徒会室に向かった。

その途中――。

「聞いた？ また怪人が出たんだった!!」「ほんとに？ あ。でも、またマリンハートが  
やつつけてくれたんでしょ？」「そつ、すごいわよね。憧れちゃう！」

廊下ですれ違った女子の会話を聞き、サヤはギョツと拳を握りしめた。

「マリンハートの正体って誰なんだろう？」「聞いた話だと、女の子らしいわよ」

ガラツ……。生徒会室の扉を開き、中に入る。生徒会室には誰もいない。扉を閉め、そこに寄りかかった。

「……父さん……」

凜とした気高い瞳が潤んだ。腕に着けたブレスレットを見つめる。脳裏に蘇るのは、過去の記憶――。

サヤの父は、偉大な研究者だった。そこに目を付けた悪の組織ゼルガの誘いを撥ねつけた彼は、ゼルガの怪人によって殺されてしまったのだ。そして、その一人娘であるサヤに送られてきたのが、アクセサリーにしか見えない変身ブレスレットだ。これを装着し戦う意志を示すことで、サヤは装甲スーツを纏い、マリンハートとなってゼルガの怪人と戦っているのだった。

父が作ったマリンハートのスーツはとても強く、サヤはこれまで苦戦することもなく悪の限りを尽くすゼルガの怪人たちを撃破してきた。このままいけば、遠くない未来にゼルガを壊滅できるかもしれない。

「絶対に、敵を討ちます……。この命を賭けてでも……!」

そう、決意を新たにしたときだった。

ドッガアアアアアアアアンツツ!! 校庭から、大きな爆発音が聞こえてくる。次いで、生徒たち――生徒会長のサヤを慕い、尊敬してくれている大事な仲間――の悲鳴

が聞こえてきた。

「まさか……ゼルガの怪人なの!？」

慌てて窓際に駆け寄ったサヤの目に飛び込んできたのは、校庭の真ん中にできたクレーターの中心、砂煙の中に佇んでいる大きな影。間違いない、ゼルガが送り込んできた怪人だ。

「こんなところまで——みんなを助けなくちゃ!!」

サヤの瞳に、不良と対峙したときとはまったく違う、悪を憎む激しい正義の炎が燃え上がる。そして、ブレスレットを着けた腕を胸元に構えた。

「装甲変身、マリンハート!!」

そう叫んだ瞬間、ブレスレットが力強い光を放つ。サヤの制服が粒子になり、傷一つない美しい少女の、顔を除く全身を黒いアンダースーツが包む。手足に純白の手袋とブーツが装着され、さらにCカップの美乳、乙女の大事な下腹部、手足のそれぞれに淡い青色の装甲が現れると、華奢なサヤの身体をしっかりと守った。最後に黄色いバイザーを装備した青いフルフェイスマスクが悪と戦うヒロインの顔を覆い、長い黒髪も纏められその中に収まる。

「変身完了! マリンハート、いくわよっつ」

クレーターを呆然と見つめる生徒たちの中に、校舎を見ている者はいない。マリンハートは変身スーツで強化された視界と状況判断力でそれを確認すると、生徒会室の窓から怪



人に向かつて一直線に飛び出した。

「やあああああつっつ!!」

一筋の青い光となったマリンハートが砂煙の中に飛び込む。それが悪の怪人と戦うヒロインであるとわかった者は誰もいない。それほどの速度で、マリンハートに変身したサヤは怪人にキックを叩き込んだ。

ガッキイイイインッ! 激しい金属音がして、マリンハートが砂煙の中から飛び出し生徒たちの前に片膝を立てて着地する。

「あつ! マ、マリンハートだ!!」「マジかよ、あれが!」「じゃあ、怪人が出たつてことじゃない!!」「頑張れ、マリンハート!!」

口々に叫ぶ生徒たち。常に怪人の撃破を続けているヒロインの活躍を知っている彼らは、マリンハートの勝利を信じて疑わない。

「グウウウッ! これがマリンハートの力か!!」

砂煙を払いながら現れたのは、二メートルを軽く越える筋骨隆々の大男だ。一見人間に見えるが、身体から立ち上る煙、放たれるプレッシャーが怪人であることを裏付けている。マリンハートのキック痕を胸につけた怪人は額に大粒の汗を浮かべ、苦悶の表情でマリンハートを睨みつけた。

「なかなかやる……!! 俺の部下たちを斃したのも頷けるな」

怪人の言葉にマリンハートは肩をピクリと動かし、ゆっくりと立ち上がる。マスクに隠れて表情は見えないが、自然体で立つヒロインには一切の隙がなかった。

「部下？ ということは、あなたがゼルガの……」

「ゼルガの幹部、ゴルバだ。なかなかいい蹴りだったぞ」

名乗りを上げた幹部ゴルバの表情に、先ほどの苦悶の影は見られない。

（確かに手応えはあった……。回復能力が高いの？ くっ、どうということ？ 解析できないわ……）

マスク内に表示されるデータを見ながら、サヤはその優れた頭脳を回転させ状況を分析していく。体格差は歴然、元々小柄なサヤと並ぶと、大人と小さな子供ほどの身長差がある。しかし、マリンハートの装甲に身を包んだサヤは、気後れすることなく幹部怪人に指を突きつけた。

「幹部の怪人がこの程度じゃ、ゼルガが壊滅するのももうすぐね！ このマリンハートがある限り、あなたたちの好きにはさせないわ！ 覚悟しなさい!! やああああっ!!」

ガガガガガッ！ マリンハートが地を蹴り、ゴルバの巨体にぶつかっていく。防御だけでなく攻撃の際にも力を発揮する装甲が、ゴルバの鉄の硬度を持つ皮膚にぶつかり火花を散らした。

「ぬうっ！ さすがに速いか！ ちよろちよると小賢しい!!」

「ああんっ！　だめっ、やだあつ。お願い、見ないでええ!!」

マリンハートの顔を守っていたフルフェイスマスクが半分ほど砕かれ、割れた黄色いパイザーからサヤの顔が覗く。いま、サヤは体勢を変えられ、屈辱の四つんばい姿勢で汗ばんだ蕩け顔をみんなの前に晒していた。

「フハハ、貴様の正体に、我らが気づかないとも思ったか？　貴様がこの時間、ここに  
いることなど調査済みよ。お友達とやらに、だらしない女の顔を見せてやれ！」  
這いつくばった少女の腰を持ち上げ、膺を剛直で突き上げるゴルバが嘲笑う。

「ううっ、いやああああ……こんなのいやよおおっつ！」

サヤは涙を流し白手袋で顔を覆うが、すでに全員に正体はバレてしまっている。

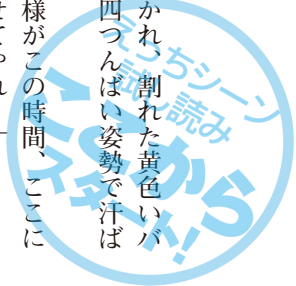
「まさか、マリンハートがサヤ先輩だったなんて……」「あの会長が、あんな顔を」

口々に囁かれる言葉が、サヤの心を抉る。みんなの恐れと憐れみに満ちた視線が突き刺さり、マリンハートはギュッと唇を噛んで漏れそうになる声を殺した。

（こ、これ以上、みんなに情けない姿見せたくないっ！　た、戦うのよっ）

「このおっ！　マ、マリンハートはまだ負けてな……んぶうっ、ちゅ、んんんッツ!!」

恥ずかしい体勢を取りながらも、再び瞳に闘志を燃やして振り返ったサヤの唇に、ゴルバの牙が生え揃った口が吸いついた。突然のことにサヤはあっけに取られ、怪人の口から



流し込まれた液をゴクリと飲み込んでしまう。

「ぷはあっ!! な、なにをするのよっ!! わたしになに飲ませ……あぐっ!!」

ドクンツツ!! サヤの身体が一瞬硬直する。そして、すぐにガクガクと痙攣し始めた。

「はうっ、ひきいっ!! な、なにこれ! ああっ、くああんっ!!」

(か、身体が熱い! 急に、こんなっ!! あ、ああっ。アソコが痛くなくなつて……さ、さつきよりずっと……き、気持ちいいっ!)

腰が勝手に動き、膣がキュウウツツと収縮する。極太ペニスを咥えていた痛みが消え、ゴルバのペニスを搾るように締まったサヤの膣内からは先ほどとは比べ物にならないほどの愛液が染み出し、幹部怪人に犯されることを悦んでいた。

「な、なんだ? どうしたんだ会長は!!」 「あんなに痙攣して……まさか、本当に感じてるのか?」 「イ、イヤッ! サヤはそんな子じゃないわ! だ、だって、そんなの不潔すぎる……」

(あ、ああっ!! みんな、そんな目で見ないで……! 違うの、これはいま変なのを飲まされたから……ひあああ、だめええっ!!)

サヤを責め立てる肉棒は、容赦なくその速度を速めていく。先ほどまでは押しつぶすように無理矢理侵入されていた子宮口はぱっくりと開き、悦んで巨大亀頭を受け入れている。乳首はさらにぷっくりと大きく勃起して、アンダーズーツの上からでもはつきりと見える。

ほどになつていた。

「くひいいいい……っ！ あ、あへええ……だめなのに……！ み、みんなに見られてるのに、こんなのいけないのに……ああっ！ と、止められないわ……！！ マリンハートのスーツがあ……うう、力、出してくれないのおっ！！ みんな、こんな汚れた顔見ないでっ！ お願ひよお……！！」

涎と汗まみれの顔を快楽に蕩けさせたサヤは、喘ぎ声を上げながら生徒たちに懇願する。「そ、そんなこといわれたって……！」「か、会長の顔、エロすぎてっ」「サ、サヤ先輩……っ」だが、男子だけではなく女子までもが、普段の凛とした姿からは想像もつかないほど乱れ、ヨガリ狂っているサヤの姿から目を離せず、陵辱されるヒロインを食い入るように見つめていた。

（や、やだ……っ！ みんなに見られてる、わたしのイヤらしい顔……敵のおちんちんにズボズボされてるとこ見られちゃってるなん、て……！ どうして、こんなに昂奮しちゃうのっ!?!）

「ああんっ！ はひいつ、か、身体が熱くて、なにかくるっ！！ ア、アソコがどんどん熱くなっへえ……ほんとにきちやうううっ！ イヤよおっ！！」

見知った人たちの見世物になっている。その事実がサヤの奥に眠っていたマゾの快楽を呼び覚まし、いまにも絶頂してしまいそうなほどの快楽が小柄な身体を襲う。正義のヒロ

インとしての理性がかりうじて流されるのをつなぎ止めているものの、サヤの心は崩壊寸前だった。

「フハハハ！ いいヨガリ顔だ!! このスーツも、もう必要ないだろう。完全に破壊してくれるわ!!」

そんなヒロインのプライドをずたずたに引き裂いてやるとでもいうように、くびれた腰を掴んでいたゴルバの腕が、悔しさと快楽に抗うため地面にめり込んでいたサヤの両手を掴み、発情した身体を弓なりに反らせる。そして、装甲が壊れむき出しになった手袋に装着されていたブレスレットをギリギリと締めつけた。

「あ、あぁっ!! それは……っ! それを壊されたら、わたしもう変身できなく……戦えなくなっっちゃうっ。だめだめだめえええ!! やめてえええ!!」

ゴルバの怪力に締めつけられたブレスレットが軋み出す。壊れかけたマスクから警告音が鳴り、もつとも大事な変身アイテムが危険な状態にあることを知らせてきた。

「許してえっ! お願ひ、お願ひだからぁっ!! それは壊さないで、あひあああああんっっ!!」

(ひああああ……っ! ブ、ブレスレット壊されちゃうのに、絶対ダメなのにつ! わ、わたし虐められて感じてるっ!! こ、こんなので気持ちよくなっちゃうなんて……変態なの……あぁっ! こ、これはあの変な液のせいよ……! だから、仕方ない……のお

っ!!)

ブシャブシャアアア!! プライドを捨て懇願するヒロインの牝穴から大量の本気汁が漏れ、結合部から地面に垂れた。弓なりになって身体を起こしたことで生徒たちからも愛液だだ漏れの様子は丸見えで、彼らは浅ましく乱れる生徒会長の姿に声も出せなくなっていた。

「壊すなどいいながら、貴様の膣はさらに締まっているではないか！ 自分の敗北する姿に感じるとは、ひどいマゾ牝もいたものだな!!」

「わ、わたしマゾなんかじゃ……ハアハアッ、これは、エッチな液のせい……ひうんっっ!!」

ガクガクガクッ!! 膣の中でゴルバの肉棒が膨れ始めたのを感じ、サヤは大きな瞳をさらに見開いて太ももを震わせる。いまやゴルバのペニスの上に乗っかっている格好だが、アンダースーツに包まれた美脚は上下に揺れ、自ら腰を振って敵に奉仕していた。

（わたしの膣内なかで、おちんちんが膨らんで……!! こ、腰が止まらないっ!! コ、コスチューム限界なのおっ! おま○この膣内おちんちんがかき回して、ああっ! ぐちゅぐちゅイヤらしい音がたまらないわ!!）

「ゴ、ゴルバあ……!! こんな、こんなの卑怯よお……っ! ああんっつ! あひあああ  
あああっつ!! 硬いのがひつかかって……ひいいいいんっつ!! も、もう限界だわ!」

「フハハハハ、いいぞマリソハート!! そろそろお前の膣内にたっぷり射精してやるッ!」  
ゴルバの言葉に、サヤは目を見開く。

「な、なんですつて!? ひっ! ま、まだおちんちん膨らむの!? あ、あぁっ! ビクビクしてる……まさか、ほんとに……ッ!」

ゴルバの肉棒が痙攣を始めたのを感じたサヤは、ゴルバが本気で膣内に射精そうとしてゐるのに気づき、半狂乱で泣き叫んだ。

「い、いやあぁあぁあぁあつ!! 射精さないでっ! 赤ちゃんできちやうっ! 敵の赤ちゃんなんてイヤッ! 膣内なか射精だしいやあぁあぁあつ!! あぁっ、ビクビクして、ダメっ、脚、動かないっ。抜けないいい……あひいいんっ、射精されちゃううううう! わ、わたしももうっ、イ、イク……っ」

ビシッ、ビシビシッ!! ブレスレットに亀裂が走り、ゴルバのペニスが大きく膨らんで――。

「ウオオオオオオオオオオ!! 射精すぞ、マリソハートオオオオツツ!!」

ドツビユウピユルルルルウウウウウウウツツ!!

「あ、あちゅいいいいいいいつつ! が、我慢できにやいつ、イ、イツツツクウウウウウウウウウツツ!!」

ゴルバの濃すぎる牡汁が発射されると同時、サヤは舌を伸ばしただらしないアへ顔を晒



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**